

学会のすそ野をひろげるために

増田 耕一*

5月23日の気象学会総会で発言しましたことのくり返しになりますが、会員みなさまのご意見をいただきましたと思い、あらためて提案します。

1. 購読会員制の提案

会員をふやす必要があるが、決め手となる方法はない、という報告が理事会からありました。

全国には、気象現象や気候変動、大気汚染、自然エネルギー利用などに関心を持ち、情報を求めている人が多いと思います。しかし、学会の会員になることをすすめられても、自分は専門の教育を受けていないからとか、会の運営に参加する時間的ゆとりがないからと、しりごみする人もいるのではないのでしょうか。これはわたし自身、気象学以外の興味ある分野について感じていることでもあります。

通常会員と別に「購読会員」のような制度を設ければ『天気』の読者はふえるのではないのでしょうか。学会は民主的な組織であり、学歴などで差別することがあってはいけません。学会活動に参加する意欲の度あいによって区分することは悪くないと思います。総会の議決は通常会員だけによることにすれば定足数割れの心配も少なくなるでしょう。

会費の負担額で差をつけるかどうか、学会発表や論文投稿の際には通常会員になってもらうようにするか、外国会員のあつかいをどうするかなど、実現するまでにつめなければならない問題が残りますが、むずかしくはない

と思います。

なお、読者をふやすためにも、『天気』がおもしろい雑誌である必要があります。特に質疑応答を活発にすることだと思います。用語の説明を求めるものでもよいでしょう。学問的な見解のちがいで論争するものでもよいでしょう。priorityに関する異議や、科学政策への意見も、陰でぶつぶつ言うだけでなく、学会誌を広場として使おうではありませんか。

2. 『気象研究ノート』と単行本

『気象研究ノート』は、昨年度5冊の予定で3冊だけ発行されたという実績から、今年度は4冊と、予算が縮小されました。

1970年代にくらべると、一般の出版社から出された気象学関係の本がふえていますから、それである程度の需要がみたされているのかもしれない。

しかし、大きな本屋の近くに住んでいない人にとっては、現在どんな本が出ているかという情報がたまりません。『天気』の書評記事や本の広告をもっとふやすことを望みます。

いっぽう、『気象研究ノート』の役割も軽くなったとは思いません。大学院のセミナーや、気象庁の職員研修で教えられている内容をまとめたなら、その場に出席できない人の学習にとって効果的だと思います。収益事業としては苦しくなってきますが、関連分野の他学会と出版物の紹介をおたがいにのせるなど、存在を知ってもらう努力をすれば、需要はほり起こせるのではないのでしょうか。

* Kooiti Masuda, 東京大学理学部地球物理学教室.

寄贈図書

書名	著者	総頁	出版社	定価
緑と文明の構図	筒井迪夫	252頁	東京大学出版会	1,200円